南の島の捨てられた少女たち

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
南の島の捨てられた少女たち

【Ｎコード】
Ｎ６７６７ＢＶ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
南の島にある架空の姥捨て島で起きている物語。この島には親から捨てられた若い少女が収容されている。彼女たちはなんと常時全裸で生活している。新入りの少女が島にやってきた。これから島入りの儀式が行われる。

少女版姥捨て島

　沖縄本島からさらに南、青くきれいな海が広がっている。大陸棚が広がるこの海に大小数々の島が点在している。住民が住んでいる島もあれば無人島もある。人が住んでいる島の交通手段は時折やってくる船くらいしかない。

　その島はたしかに有人島である。しかしまともな暮らしをしている島民はいない。この島の持ち主は、中世の魔女を彷彿させるかのような不気味な老女である。ここには十数名の若い女性が生活をしている。彼女たちは養育してくれる親がいないか、親に捨てられた者たちである。まるで姥捨て山の少女版とでもいった場所である。親の手におえなくなった子や養育を放棄された子がこの島へと収容される。一度この島に来たら生きて戻ることはまずない。親が探したり迎えにいくことはないからだ。それゆえ、島の生活が知られるということはありえない。老女の手下が全国に散らばっており、親が捨てたいと思う少女の噂を聞くと飛んでいく。親としては無償で不要な子どもを処理できるのであるからありがたいものである。そんなわけで心も体も荒んでいる少女たちばかりが集まっている。

　ある日、中学を卒業したばかりの少女がこの島にやってきた。卒業したとはいってもほとんど中学校へは通っていない。義務教育が終わったと同時に親はわが子を捨てた。少女は名前を遥といった。遥が島に来て最初に見たものは、そこに前から住んでいる全裸の少女たちであった。この島では衣服代がもったいないということ、そして南国の温暖な気候ということから衣服は一切支給されない。夏でも冬でも、家の外でも中でも常に全裸である。１３歳から１８歳までの少女であるから、本来は羞恥心の強い思春期の時期である。

外界との交流が全くないこの島ではそんなことは一切考慮されない。遥は自分も間もなく着ている服を没収されるのだと悟った。

島の周囲は崖となっており、飛び降りれば即死は免れない。一か所だけ洞窟になっている場所があり、島の外に行く場合は洞窟まで梯子をおり、そこからモーターボートを使用する。もっとも、飛び降りるのも容易ではない。島の大部分は険しい岩になっており、ロープでもなければ登ることはできず、わずかに低くなっているところには高い塀が作られている。そのまま監獄としても使えそうな島である。ここには収容されている少女のほか、老女とその手下が数名、生活している。１８歳を過ぎて、見込みがあるものは老女の手下となる。手下となれば衣食住に困ることはない。見込みがない者は男性の手下の性奴隷としておもちゃにされる。島の生活はほとんどが自給自足である。野菜や果物を育て、時には魚釣りに出かけていく。豚や鶏も飼育している。少女たちは狭い居住棟に押し込められ、３段ベッドで生活している。個人で使えるスペースはほとんどないが、雨露をしのげることだけでもありがたいと思わなければならない。あるのはベッドとトイレくらいのものである。

入島儀式その1

遥は老女の手下に連れられ、集会所へやってきた。集会所の奥には見るからに気味が悪い老女が待ち構えていた。そして島の全員に招集がかかり、全裸の少女達が集まってきた。

「遥といったね、おまえも今日からこの島の一員だ。この島のルールには、絶対従わなければならないよ」

老女がいった。手下に両脇を固められている遥は仕方なく小さな声で返事をした。ここで反抗したところで何もはじまらない。

「後ろにいるのが今日から一緒に過ごす仲間達だ。遥、おまえと仲間達では格好が違うね。さっさと服をぬいでしまいな。この島では衣服を身につけることは一切できないのだ」

手下の中には男性もいる。思春期の遥は恥じらいもあったが、やむを得ず服をすべて脱いで全裸になった。脱いだ服はひとまとめにして没収された。遥は仲間達の体を見て、不思議なことに気づいた。1つは皆、胸が小さいことだ。思春期というのにほとんど膨らみがみられない。それは栄養状態が悪く下着もつけていないことによる。そしてもう一つは全員、股間に当然ある筈の体毛がないことだった。この島ではある程度毛が生えそろうと老女が自ら剃ってしまうのだ。その時、少女達は老女に向かって股を大きく広げ、自分の恥ずかし

い場所を露わにしなければならない。こうすることで屈辱の思いを強くさせ、絶対服従を心身におしつけていくのであった。

入島儀式その2

「遥、おまえはまだ皆と同じにはなっていない。それは何だかわかるか？」

老女が冷たい声で聞いた。遥はすぐに

「私の股間には体毛があることです」

と答えた。心の中ではもう一つ、気になることがあった。それはどの少女も性器が全くはみ出していないことである。遥は昔、自分の性器がはみだしていることを気にしていた。それなのにここにいる十数名は、股に体毛がないにも関わらず、小陰唇や大陰唇のはみ出しはまったくなかった。突然、老女は

「美紀、そこの台にのって股を開きな。遥にしっかり見せてやりな」

といった。同じ歳くらいだろうか、美紀と呼ばれた少女は中央の台に上ると素直に足を開いた。それを見た瞬間、遥は大きなショックを受けた。そう、股には性器が何もないのだ。股を開けば普通、大陰唇があり、その内側には小陰唇がある。そして小陰唇が閉じたところには皮に覆われたクリトリスがあるはずだ。その全てがなく、ただ穴があいていて一本の筋があるだけ、というのが美紀の股間であった。続いて少し年長と思われる優花が呼ばれて、同じように台の上で股を開いた。そこには痛々しい傷跡がはっきり見えた。

そう、この島に来て最初にされることは、女性外性器の全てを奪い取られることなのである。全てを奪い取ることで少女達から性欲を消滅させること、そして絶対服従の関係におくことが目的であった。いずれはほとんどの少女が男性達の性奴隷となる。そのときに余計な性欲はない方が良い、との考えから、全ては切り落とされてしまう。

「さあ、遥、おまえもこの島の一員にしてあげようね」

老女が不気味な笑いを浮かべて言った。遥の顔から血の気がひいて真っ青になった。しかしもうどうにもすることはできない。

入島儀式その3

部屋の中には収容されている少女全員が、哀れむような目で遥を見ている。かつて自分たちも味わった苦痛であるから、胸の内は痛いほどにわかる。

ついに遥は台の上に登らされ、皆がいる方へ足を大きく開かされた。すぐにカミソリを手にした老女が股の間に陣取り、恥丘部の体毛をそり落とした。続いて大陰唇周辺の毛を剃ると、細かい部分は手下に託した。手下は小さなハサミを使い、大陰唇の内側にある毛や肛門付近の毛までをそり落とした。遥にとっては小学生で発毛して以来、初めての剃毛である。いきなり大陰唇をめくられたり無理な体勢をさせられ、苦悶の表情を浮かべた。剃毛が全て終わると次は消毒である。アルコールの強烈な臭いが室内に漂い、遥の性器は万遍なく消毒された。

いよいよ切り落とされるのかと遥は覚悟を決めたが、まだもう一段階ある。ここでは切り落とす前に性器全体へお灸を据えて、痛みを増大させる。ここからは本当に苦痛が伴うので、暴れないようにしっかり固定しておく必要がある。この役目は屈強な男性の手下3人に託された。1人は遥の腹の上に馬乗りとなって両手首を強く握った。残る2人は遥の足の下へ腕をのばして、太ももを抱きかかえて大きく広げた。その間に入った老女は手にもった百草に火をつけた。焦げ付くようなにおいが部屋に漂うと同時に、遥の苦しそうなうめき声が聞こえてきた。どこにあてられたって熱い、僅か1秒でも熱いお灸である。それを体で一番敏感な場所にずっと当て続けられる

のだから、苦悶は言葉で言い表せない。

仲間達も目を覆いたくなる状況だが、手下が見張っているので仕方なく正視している。お灸はまず陰唇の左側に、次は右側に、そして最後にクリトリス付近へあてられる。一番敏感なクリトリスが最後にまわされ、何重の苦しみが与えられる。１カ所に要する時間は約５分、終わった時には皮膚が真っ赤にただれ、性感も消失してしまう。最初の頃は「痛い熱い」と叫んでいた遥であるが、それも力尽きていく。時折思い出したように叫ぶだけである。

まだこれは入島儀式の半分である。

そして島の一員へ

いよいよ性器が切除される時が迫ってきた。焼かれているからといって痛みを感じないわけでは勿論ない。お灸が終わりただれている性器に生理食塩水で消毒され、一度消えかけた意識が再び呼び戻された。

このまま性器を切除されるのかと思ったが、予想に反して遥は体を起こされた。切除の瞬間をしっかり自分の目で見させるという仕打ちだ。台の上で遥はあぐらをかいて座らされた。先程馬乗りになっていた男は遥を羽交い締めにして後ろから固定した。２人の男は引き続き、足を大きく持ち上げた。遥には自らの股間がしっかり見えている。

老女は鋭いナイフをもって再び目の前に姿を現した。そして大陰唇の一部をつまむと、ナイフをいれてそぎ落とした。まず大陰唇、続いて小陰唇を少しずつそぎ落としていく。そのたびに大量の鮮血が股間から噴き出してくる。それをまたひどくしみる生理食塩水が洗い流していく。何度かナイフを入れようやく陰唇がすべて取り除かれた。最後に残ったのがクリトリスである。

クリトリスを覆う包皮にメスが入った。最後の力を振り絞るが如く、大きな叫び声をあげる遥であった。鮮血が周囲を汚し、それを生理食塩水が拭っていく。ついに先端を露出させたクリトリスにナイフが入った。一度だけではなく、先端から少しずつ切っていく。露出

した部分が少なくなると特製金具でクリトリスの根元部分を引っ張り出し、そこにもナイフを入れた。

再び綺麗に洗い流されると遥の股間は仲間達と同じ何もない状態になった。ようやく遥も島の一員となった瞬間である。これでもう性感を得られる部分は体内にない。体外にある女性の部分を全て失った遥は、これからずっと、南の孤島で全裸のまま暮らしていくことになる。